千葉歴史の散歩道

縄文海進、その後は？

県教育庁教育振興部文化財課発掘調査班文化財主事　久我谷（くがや）　渓太（けいた）

最終氷期に終わりをもたらした気候の温暖化は、極域などの氷床や氷河を溶かし、同時に海水量を増加させていった。海岸線は徐々に陸地の奥へと入り込んでいき、ついには現在の海水準・海岸線を超えて進んでいった。日本列島ではこの現象を一般に「縄文海進」と呼び、縄文時代早期末（今から約7000年前頃）に最高頂期に達したとされている。ではその後、海水準・海岸線はどのようにして現在の位置に落ち着いていったのであろうか。

海進の最高頂期は、縄文時代中期初頭（今から約5000年前頃）まで続いたと考えられている。海岸線の変動が緩まったことで、河川が内陸から運んできた土砂が沿岸部に安定的に堆積するようになり、低地の形成が進んだ。これにより陸地は拡大を始め、海岸線は後退していった。海水量の増加は海底の沈降をもたらす一方で陸地を隆起させ、海水準は相対的な低下へと転じていく。低地の形成はより盛んとなり、広い干潟や内湾・入り江を塞ぐ砂州の形成が促進された。これらの地形が貝の採集地や漁場として縄文時代の人々にさかんに利用されたことは、加曽利（かそり）貝塚（千葉市）をはじめとする近傍の台地上に形成された同時期の大型貝塚の存在から伺い知れる。

海退が一時的に大きく進行した時期があったとする指摘もある。低地の拡大と海水準の変動がある程度の均衡をもって進んでいたところに急な海退が生じると、低地の目前に広がっていた海底は後退した海岸線まで陸化して平野となる。河川は新しい海岸線へと平野上を延びていき、その過程で平野を侵食して浅い谷を形成する。このような谷地形の多くは２つの時期に集中して認められ、それぞれ「縄文中期の小海退」・「弥生の小海退」と呼ばれている。特に弥生の小海退の頃には、谷の中に堆積した土壌の分析などから、海水準が現在よりも低くなったとみられている。

海水準の上昇とその後の低地の拡大は、縄文時代と同時期に世界各地で生じた現象である。対してこれらの小海退は日本列島内でも認められない地域があることから、その発生要因を海水量の変動と安易に結びつけることはできない。千葉県の沿岸では、雷下（かみなりした）遺跡・道免（どうめ）き谷津（やつ）遺跡（市川市）などの土層堆積状況からその存在が指摘されているが、事例は限られている。まだまだ研究の余地は大きい。

弥生の小海退により低下した海水準は、古墳時代の初頭にはおおよそ現在の水位まで回復したといわれている。その後は、何度かの小規模な海水準変動（平安時代の海進など）を経て、現在へと至っている。

さらにその後は、どうなっていくのだろう。地球温暖化の影響により海水準の上昇は加速を続け、小さな島や低い土地の水没が危ぶまれている。この現象は、人類が自然に働きかけたことによって引き起された、現在進行中の「海進」である。ならば海退へと潮流を導くことができるのもまた、今を生きる我々人類の手にかかっていることは疑いない。

千葉教育　菊（No. 676）　令和４年10月27日発行

編集・発行　千葉県総合教育センター　（代表）神子　純一
〒261－0014　千葉市美浜区若葉２－13　TEL　043－276－1204
URL　https://www.ice.or.jp/nc/
印　刷　所　千葉市療育センター　いずみの家
〒261－0003　千葉市美浜区高浜４－８－３　TEL　043－216－2465